

きんぎょが

一人ひとりが否応なく 考えるべきこととしてフクシマはある

伊藤氏貴

いとう うじたか／文芸評論家、明治大学准教授



『フクシマの後に 破局・技術・民主主義』
ジャン＝リュック・ナンシー＝著 渡名喜庸哲＝訳 以文社
2520円 ISBN978-4-7531-0306-5

当

時の菅直人首相の対応が
適当だったかどうかとい

う議論には、彼が理学部応用物
理学科卒業だということも関係
していた。そこに過信が宿って
いたのではないか。しかしもし
やそんなことはどうでもよい。
文系の首相でも、おそらく同じ
程度のことではできた。同じ程度
のことしかできなかった。当時の
のそれより優れたたどのような対
応がありえたか、その具体的手
段は今もって明確にあがってい
ない。つまりあれが「最善」の
対応だったということだ。

いやその状況にすでにわれわれ
がどっぷりと漬かっているとい
うことを思い出させたのがフク
シマという経験だった。
だから、ナンシーが「フクシ
マの後で」と言うときに、それ
は世界の急激な変革を指すので
なく、むしろフクシマという事
件が明らかにした、その「前」
から綿々とつづく現代文明の状
況にわれわれの注意を向けよう
とするものである。

政治家と科学者との別もなく、
すべての人間が小ささの点で同
等になってしまおうということだ。
しかも、その力は単独で存在
するのではなく、分野を超えて、
別の力と分かち難く結びついて
しまっている。脱原発が進まな
いのは、原子力技術の問題とい
うより、経済や内外の政治問題
のためだ。われわれはその力の
交錯の中でただ翻弄されている
にすぎないのだが、フクシマ

手段も、人間も動物も、すべて
がこの力の前では交換可能な
「等価」なものとなる。
しかし、「等価性」とは言い
換えれば「無価値」というのと
ほとんど同じだろう。ただ、わ
れわれがフクシマのような事態
を忘れ去り、複雑に絡みあうこ
の文明のなかで翻弄されている
かぎりにおいていくばくかの価
値を持つような錯覚に囚わ
れているだけなのだ。

を、この文明をどう捉えるのか
という大局から考えなければな
らないということなのだ。本書
の副題に「民主主義」が含まれ
ているのもその理由による。
政治家や科学者に任せきりに
するわけにはいかない。本書の
一部は、日本から要請された講
演に基づくが、当然こうした要
請が哲学者である自分のところ
にくるだろうと予想していたと
ナンシーは言う。一人ひとりが
否応なく考えるべきこととして
フクシマはある。それはつまり、
進歩や発展だけを指すこの文
明をどうするかということでも
ある。政党が乱立し、争点のわ
かりにくい今回の選挙で果たし
てそこまでの大局に立った候補
者が一人でもいるのだろうか。

しかし、いまだに放射線がま
き散らされつづけるこの現状を
して「最善」とは。不条理な思
いを飲み込みつつそう言わねば
ならない状況をつくりだした、

おそらく、当時首相の座にあ
ったのが原子力の専門家だった
としても、だからといって事故
の被害が著しく減少されていた
と思う者はないだろう。つまり、
われわれはもはや、自ら制御で
きないほど巨大な力を手にして
いるのであり、その力の前では、

「前」はともするとそのことを
忘れていたのではなかったか。
ナンシーは、この技術・政治・
経済の不可分にして巨大な力の
前に人間の意志や判断が無意味
化する状況を「一般的等価性」
と呼ぶ。文系も理系も、政治家
も科学者も、善も悪も、目的も

「等価性」でなく真の「平等」を
勝ち取ること。「平等」とは、「等
価」のように個別性を奪われて
はおらず、それぞれが特異な存
在として崇敬をもって共存する
ことだ、とナンシーは言う。

だから、問題は、原発をどう
するかにとどまらず、この社会